

淚香全集

2

涙香全集 第2巻

第4回配本

昭和五十四年五月三十日 発行

定価三八〇〇円

著 者 黒 岩 涙 香

発 行 者 久 保 欽 哉

〒187 東京都小平市小川西町二七三
発 行 所 宝出版株式会社

電話(03)341-2733

印刷製本・参陽社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

大盜賊	三
人耶鬼耶	一六七
解說	四一九

小裁
説判

大
盜
賊

前　　文

或は曰ふ西洋小説の妙は細を穿つに在りと実に然り而れども細を穿つをのみ以て西洋小説の妙と為さば其構想こうさう（デザイン）は如何するや構想の妙は取るに足らざるか余は曰ふ細に穿つは文章の妙なり小説の妙は構想いたの至れるに在りと、構想既に至りて文章も亦妙なる是れ小説の上乗に非ずや余が如きは既に構想の至るを致すの才なく唯平生読書の癖に頼りて記憶せる西洋小説の構想を奪ひ来るのみ構想は奪ひ来るも文章の細は採る能はず文章既に細を欠く故に其構想其趣向も亦細なる所に至ては奪ひ得ずして愛を割くも亦多し是れ唯に遺憾の大なるのみならず実に余が深く恥る所たり殊に此篇の如きは日刊の新聞紙上に載せたるが故に故に大綱を取り其小節に至りては愛を割きたる所頗る多し書肆の請ひに会ひ更に筆を取りて補はんと欲したれど俗事多端の為に其閑を得ず憾うらみと恥とを忍びて終に鉛字に附する事とは成れり

余は敢て文章構想共に原作の精を失ひたる者と自首するなり若し原作者をして見せしめば余を何とか云はん、余は原作者の怒りを甘受すと雖ども而かも彼れをして巧拙の責に任せしむるに忍びず乃ち故らに著者の名を没して余自ら其衝に当れり余自ら筆を取りながら若し衝に当るを厭はば筆を取らざる他人にして誰か余の身代りとするを甘せんや人は曰ふ其作我意に満るが故に我名を署するなりと余は曰ふ我意にすら満ざるが故に他人の名を署し難しと読者若し余が曰ふ所を疑はば本文を一読せよ即ち余が他人の名を仮るに忍びざる所以を諒し得ん、余とは誰ぞ

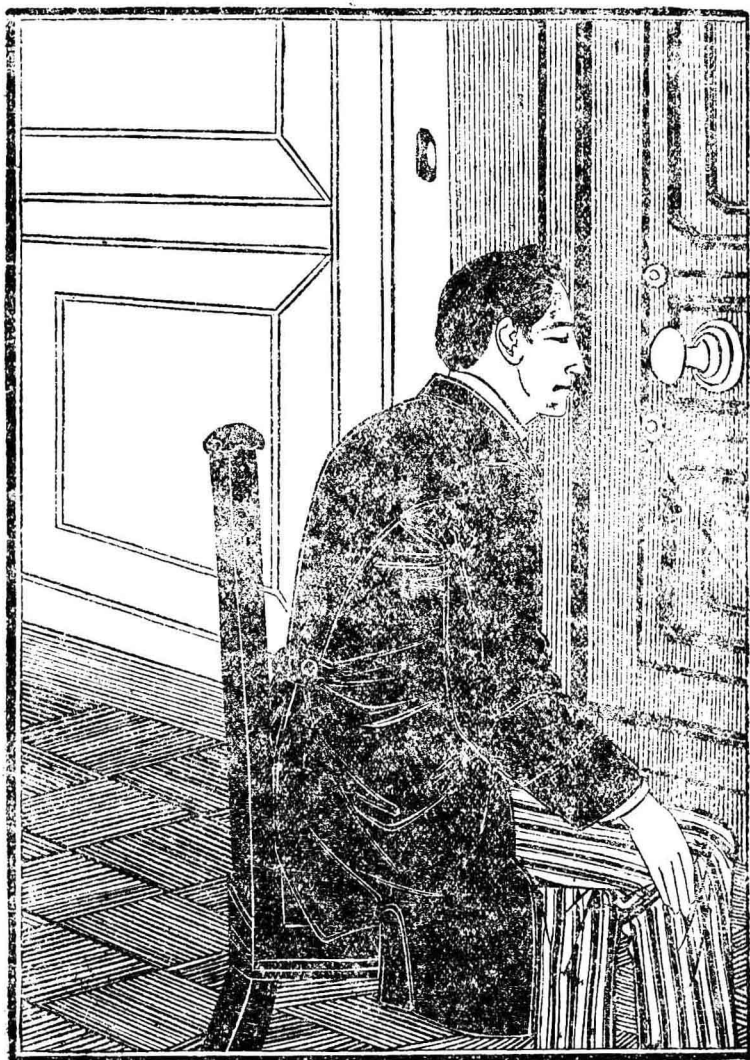
読破書齋主

涙 香 小 史 是のみ

明治二十二年四月記す

大盜賊













卷中著るゝ所の人名は皆西洋人なるを以て未だ洋語になれざる婦女子の記憶し難く遂に善惡を

混合するが如きの憂ひ無きにしもあらず故に左に示す如く人名を日本人名に変換せり雖然地名の

如きは事實を確めんため変換せず見る人其心して読たまはんことを

○銀行頭取小倉氏は

●ホーフル氏

○伯爵久良明は

●クタメロン氏

○貴公子多羅尾は

●ラコウ氏

○會計長布施友江は

●フロツペ氏

○探偵長礼克は

●レコツク氏

○造船所長雅数は

●ガストン氏

○路易は

●ルイ氏

○探偵治助は

●シプスケ氏

○頭取の姪お蓮は

●デーレン

○お竹は

●チブシー

○小倉夫人は

●ホーフル夫人

○お蘭は

●ランチン嬢

○腰元お米は

●ミホメ

○華族華房は

●ヘルビー氏

○小僧亀吉は

●カペール

○探偵長の息子礼達は

●カルタス氏